
思っても、想っても。

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思っても、想っても。

【Nコード】

N6640V

【作者名】

月

【あらすじ】

いけないとわかっていても、

止まらない運命

読む前に▼

主人公のかなえは世界史の野村先生に片想いしています。野村先生もかなえの事を気に入ってくれていて、とっても優しくしてくれていました。段々仲良くなるにつれ、野村先生はかなえの気持ちに気が付きました。野村先生は妻子持ち。もちろん、その気持ちに答える事は出来ません。けれど、野村先生は今まで通り優しくかなえに接してくれました。そしてついに、野村先生とお別れの日がやってきたのです。

ついに卒業式がやってきた。いつものように放課後野村先生と会う約束をしている。今日で本当にお別れだなんて、すごく悲しくて切ない。

式中、ずっと野村先生の事を考えていた。楽しそうに世界史を語る野村先生、どこか遠くを見つめる野村先生、優しく微笑んでくれる野村先生。わたしの青春は野村先生がいないと成り立たないと言っても過言でないぐらい野村先生が好きで、野村先生を好きな自分が大好きだった。そんなことを思っていると、自然と涙が溢れてきて。けれど、皆とは意味の違う涙が少しだけ心地好くて、悲しいはずなのに、心が温かくなった。

失礼しますと言いながら中に入ると、既に野村先生がいた。
「生徒まぐの大変だったよ。やっぱ放課後は森本じゃないとな。」

なんて、コーヒークップ片手にわたしに微笑む。

ほら、また好きが増えた。

ねえ、先生、分かってる？今日で本当にお別れなんだよ？どうしてまたそうやって、わたしの気を引こうとするの？気づいてるんでしょ、先生？わたしが先生を好きだって。せつかく気持ち伝えないで、涙と一緒に流してしまうつもりだったのに。先生のほか。

わたしは二人がけのソファに座っている先生の横に、ちょっと不機嫌な顔で腰を下ろした。

「なに、森本怒ってんの？」

「怒ってません。」

「俺には分かるんだぞー、森本。お前は怒ってる。どうした、せつかくの卒業式に。俺が聞いてやるから、言ってみな。」

真剣な顔でわたしを見つめる先生。全部見透かされてるみたいで怖い。でも先生の目にわたしが映ってる。それだけで嬉しくなる。

先生。先生が悪いんだよ？先生がわたしに優しくするから。優しくするから、怒ってるの。わたしは先生の一番にはなれないのに。

「ねえ、先生？」

「んー？」

「最後に、抱きしめてくれませんか？」

「えっ、」

「卒業の記念と、わたしの合格のお祝いに。」

につこりと微笑んで言ってみた。正直抱きしめてくれるとは思わない。だって、先生は先生だし、それにわたしの気持ちにも気づいてるはず。でも、もし抱きしめてくれるのなら、それを最後の思い出として、一生胸に秘めておきたいのです。

だから、ね？お願い、先生。

「――、いいよ。森本は俺のお気に入りだからな。特別だぞ？おいで、かなえ。」

と言って、先生はわたしを抱きしめた。何が起こってるのか分からなかった。ただ、わたしの目の前には先生の肩があつて、「かなえ」って呼んでくれた先生の声だけが耳に残っていた。

「なあ、かなえ？」

耳元で囁かれる声に、一気に意識が蘇つてた。体も急に熱をおびて、心臓がどくどくいいはじめる。

「、なん…ですか？」

「俺と会えなくなるの、寂しい？」

「…寂しいです。」

「そっか…。」

先生は消え入るような声で言った。

「先生も寂しいですか？」

「…ああ。」

数秒の沈黙。

なんだろうこの感じ。今なら、言える気がする。

「先生？かなえ、先生の事大好きでした。」

「…うん。」

そう言いながら先生は、そっとわたしを離れた。

「泣かないで。」

いつのまに、わたしは泣いていたんだろう。先生がかなえの顔を両手で包んで、親指で涙を拭ってくれる。

「なあ、かなえ？これで一生会えなくなるわけじゃないだろ？かなえが会いたくなったら連絡すればいいし、かなえも、俺が手紙書いてって言ったら書いてくれるだろ？」

「…書きます。」

「でもそれは、俺がお前を生徒だと思ってるから。だから、お前も俺の事、先生だと思ってくれないと無理だ。」

「…わかってます。」

「そっか、ならよかった。」

「…もう泣くなって——。」

「だってっ、ひっく、」

「…じゃあ、」

と言いながら、野村先生の顔が鼻と鼻がくっつく位まで近付いた。

「これが、俺とお前だけの最後の秘密だ。」

—そして、先生は目をつむった。

END

いつか罪に吞まれても（前書き）

つづきです（> o > o > o > o >）

いつか罪に吞まれても

あの日から2年の月日が経った。高校を卒業して今は大学生生活を楽しんでいる。野村先生とは年に数回連絡を取るぐらいで、教師と生徒としてお付き合いしている。特別な感情とかそういうのはもうない、って言ったら嘘になるけど、今は大学でできた彼氏が一番だから、良い思い出として胸の中に秘めている。

そういえば、今度地元に戻ることになった。なぜかという成人式が地元で行われるからだ。20歳になったのは結構前だけど、久しぶりに友達にも会いたいし、もしかしたら先生に会えるかなつか期待しちゃったりして。年賀状でそのことを伝えたと、格式ばった言葉の下に“俺も会いたい。連絡待ってる。”と、それだけ書いてあった。わたしは嬉しくなつて先生にメールした。すると、すぐに先生から電話がかかってきて、“メールで良かったのに”と言うと、“かなえの声が聞きたくて”なんてまた甘い言葉を囁いて、相変わらずだな、と思ったけど、どこか元気がないような気がした。何かあったのか聞こうとも思ったけど、またすぐに会えるしその時でいいかなと思って電話を切った。約束は地元を離れる前の日の夜、昼間は受験シーズン真っ盛りの先生にはちよつと厳しいみたい。先生らしいな、となんだか懐かしくなった。

成人式が終わって、ここ数日地元を満喫中。ご当地巡りをしたり、20歳になったから、友達とも飲みに行つてワイワイ騒いだり、と充実している。そして今日、ついに野村先生に会う日がやってきた。場所は先生が決めてくれるみたいで、まだどこに行くのか聞かされていない。とりあえず、家まで迎えに来てくれるらしいので、やりすぎにならない程度に目一杯おしゃれをして待っている。

ブーツとクラクションを数メートル先の車が鳴らしている。なかなかの高級車だ。誰だろうと思っていると中から降りて来たのは野村先生だった。

「森本、久しぶり！元気にしてたかー？ほら乗って。」

そう言っただけ先生は助手席のドアを開く。前々から思ってたけど、野村先生は紳士的だ。ちよつとした気遣いがとても優しいくて、それが嫌味っぽくないところがまたいいのだ。

「よし。じゃあ、行くか。」

先生は車を走らせた。エンジンの音が響く。

「どこに行くんですか？」

「んー？それは、着いてからのお楽しみだ。」

あつ、そういえばお前、明日何時に発つのか？」

「えっとー、夜の8時の便です。」

「じゃあ、大丈夫だな。」

「えっ？」

「あー、こつちの話。どうだ、大学は楽しいか？」

と言っただけ先生は話を切り替えた。それから、大学の話や母校の先生の話を盛り上がっていると、ようやく目的地に到着。着いた先は高級ホテルの料亭。フレンチやイタリアンのレストランじゃないところがまた先生らしい。案内されたのは小綺麗な個室。かなえは先生の向かい側に座った。

「どうしてここに？」

「たまに来るんだ、：ひとりで。」

「ひとりで？」

「ああ。自分だけの穴場は誰にも教えたくないものだろう？」

楽しそうに笑いながら、わたしのグラスにビールを注ぐ先生。じゃあ、どうして先生はわたしをここへ連れて来たのだろうか。

「かなえは特別だからだよ。」

「えっ、」

「顔になんでだろうって書いてある。」

「うそっ。」

思わず顔に手を当ててしまった。

「うわっ、恥ずかしいー。」

「はは、かわいいなー、かなえは。」

「もう！からかわないください。」

「ははっ、ごめんごめん。懐かしくってついな。」

さっ、乾杯しょ！」

乾杯をして、箸に手を伸ばす。たくさんの料理がでてきた。どれも凄く美味しくて、一品一品に感嘆すると、先生は優しく相槌をうつてくれた。

そして2人ともお酒が進み、ほろ酔い気分になってきたころだった。

「そっいえば、かなえ、彼氏はできた？」

「え、」

「かーれーしっ！できたの？」

思わず言葉が詰まった。彼氏はいるけど、なんだか先生には知られ
たくなくて。自覚したくなかったけど、今日一日で高校の頃の気持
ちを一気に思い出してしまったようだ。今日までずっと、心の中で
ひた隠しにしていたのに。こんなにも脆く崩れてしまう。
わたしは今でも先生のことが好きなんだ。

「それができないんですよねー、残念なことに。」

——かなえは噓をついた。

いつの間にか、会えない時間がかなえの思いを募らせていたのだ。

「そうかー、いないのか。」

「、先生こそどうなんですか？奥さんとはどうなんですか？」

「奥さん？」

あー、別れちゃったんだよね、俺。

離婚しちゃったんだ。去年の暮れに。」

先生はとても悲しそうだった。そっか、だからあの電話……。先生
のことを思うとわたしまで悲しくなってくる。

「かなえ、こっちにおいで。」

と言いながら先生は、自分の隣をポンポンと叩いた。わたしがちょ
こんとそこに腰を下ろすと、先生はわたしの両頬を包んだ。

「かなえはそんな顔しないの。」

「だって、……。」

「かなえは俺の特別なんだから。」

……お願い、笑って。」

あまりにも悲しそうに笑いながら言うから、思わず先生の手にながしの手を重ねた。

「先生？…泣いて、いいんだよ？」

わたしがそういうと、先生は思い切りわたしを抱きしめた。

「、、、、…部屋、取ってあるんだ。」

俺は酒呑んじやったから、かなえのこと送ってあげられない。

「…一緒に、来る？」

衝撃的だった。だって、大好きな先生が今こうしてわたしを抱きしめている。どうして、先生。わかんないよ。わたしはどうしたらいいの？

でも、こんなにも弱ってる先生を見たら、

頷くことしかできなかった。

* t o b e c o n t i n u e *

藤田鳴鶴の政治小説（前編）

ついでに（＜○＜○＜○＞）

夢ならばここで終わらせて

「俺、シャワー浴びてくるから、待ってて。」

先生がそう言ってお風呂場に向かうと、わたしは部屋の中を見渡した。さすが高級ホテル。部屋は広いし、とても綺麗。でも、なにやりベッドがでかい。しかも、ダブルルーパー！！先生は、わたしとそういうことがしたいってことだね…。なんか複雑。どうしよう。今日の下着可愛かったっけ！？ あー、ぎりOK！可愛いっちゃ、可愛い。ピンクだし。

「かなえー？いいよ、入って。」

「あっ、うん。」

びつくりしたー。だって先生、タオル腰に巻いてるたけなんでもん目のやり場に困る。あっ、ちよっ、ちよっ、ちよっ、わたしの目の前でバスローブに着替えなくてよっ、もう！

とりあえず早く入って、きれいにしてこなきゃ。

「上がりましたー。」

着慣れないバスローブを着て、ベッドまで行くと、寝っ転がっている先生がいた。

「先生？」

「んっ、かなえ。上がったんだ。」

「寝てたの？」

「うん、ちよっと。」

「疲れてるんでしょ？大丈夫？」

「ん、大丈夫。かなえ、こっちきて。」

「ん、」

「髪、濡れてる…。…なんかエロイ。」

「ばか。」

甘えたな野村先生を初めて見た。ペースに呑み込まれてしまいそう
だ。わかってる？先生。わたしそんなに軽くないんだよ？わたしの
髪に触れている先生の手をそっと離れた。

「じゃあ、先生が髪乾かしてよ。」

「ええー。そのままの方がエロイのに…。」

「もう、ばか！ね？お願い。」

「ったく、しょうがないな！。」

あ、やっと笑った。今までずっと悲しそうだったのに。

ドライヤーを持ってきた先生は、わたしの髪を乾かしながら言っ
た。

「かなえの髪、綺麗だね。」

「そうかな。」

かなえがそう答えると、先生は耳元で囁いた。

「ちゅーしたくなっちゃう。」

自然と絡み合う視線が、この後の出来事を予感させた。

先生がわたしにキスをする。それはとても甘美なキスのはずなのに、なぜだか苦いところがあつて。気になつて微かに目を開くと、先生も気づいたみたいでわたしを見る。キスはよりいっそう深くなつた。お互いの存在を確かめ合うようなキス。さっきはあんなに笑つていたのに、わたしの髪を撫でる手から、強引に絡み付く足からだつて、先生の悲しみがにじみでていた。唇はそのままに、先生の手が首をつたつて下へと降りていく。それが胸へとたどり着いた時、思わず息がもれた。それを聞いて、フツと笑う先生。

「ねえ、っ、先生？」

「なあに？」

「どうしてそんなに悲しんでるの？」

——先生の手が止まつた。

「……どうしてそんな目でわたしを見るの？」

ねえ、先生？そんな顔の先生に抱かれたつて、全然嬉しくないよ。

「なあ、かなえ。」

お前は

……俺のこと、好きか？」

「えっ、」

「俺はっ！、この2年間ずっと、かなえのことが忘れられなかった……。」

かなえが高校に入学して、俺はかなえのクラスの授業を受け持つことになった。皆がうとうとしている中、お前だけが俺のことを見て楽しそうに授業を聞いていた。そのはずなのに、なかなか点数は伸びなくて。きつとそんなところが可愛かったんだろうな、と今になって思う。

覚えてるか？かなえが一度だけ俺の授業で爆睡した日のこと。俺らしくないくらい心配しちゃってさ、放課後かなえを呼び出したんだ。理由はただの寝不足で、ほんとくだらないことだったけど、実はそれが始まりだったんだよな。

それからかなえは頻繁に俺をたずねるようになった。授業の質問を聞いたり、時にはコーヒーを飲みながら2人で談笑したり。凄く楽しい時間だった。

かなえが3年生になったある日、俺はかなえの気持ちに気づいた。俺は教師でかなえは生徒。しかも、俺には家庭があった。その気持ちに答えてあげられるはずがなかったんだ。でもいつしか、かなえと過ごす時間は俺にとってなくてはならないものになっていて、どうしても手放すことができなかった。だから俺は気づいていないフリをして、かなえを側に置いておいた。

そして、あの日がやってきたんだ。かなえに気持ちを告げられたとき、思わず胸が高鳴った。けど、それはすぐに隠した。怖かったんだ。そんな感情が、俺の中に、かなえを愛しいと思う気持ちが、俺の中にあることが。だからキスした。俺の心に蓋をするように。二度と出て来られないように。

かなえが卒業して、俺は放課後ひとりになった。最初は自分の中で何が起きているのかわからなかった。ただ何かが抜け落ちて、でもそれは、思っている以上に大きなもので。それがかなえだとわかったときにはもう、俺はもぬけの殻になっていた。

かなえの存在を埋めようと、妻を何度も掻き抱いた。けれど目を閉じればかなえの姿が浮かんで、妻の喘ぐ声が、絡み付く腕や足が、

全部かなえのもののような気がして、まるでかなえを抱いているような気分だった。それから、かなえを抱くフリをして何度も何度も妻を抱いた。もちろん、それに妻が気づかないわけがなくて。とうとう言われてしまったんだ。“あなたは、誰を泣いているの？”妻は俺の首に腕を回して、そつと瞼に口付けた。そして真っ直ぐな視線を俺に向け、“別れましょ。”と言。妻は次の日の朝には子どもを連れて家を出ていた。食卓にはいつものような温かいご飯はなく、代わりに妻の名前の下に印が押された離婚届が置いてあった。妻には悪いことをしたと思った。それでも考えるのはかなえのこと。そう、俺は堕ちるとこまで堕ちてしまっていた。

離婚届を提出して家へ帰ると、ここでもうやく家の中に何もなかったことに気づいた。あるのは生活に必要なものだけで、まるではじめから俺だけがここに住んでいたような気さえた。俺はひとりになった。かなえを失って、家族も失った。急に襲いかかる虚無感。寂しかった。寂しかったんだ。

「…かなえに会いたかった。」

今までのことを語る先生は本当につらそうで見えていなかった。でも、こんなにもわたしを必要としてくれていたんだと思うと、嬉しくて仕方がなかった。

ただ、
ひとつだけ気になることがあった。

「会えたよ、先生。先生はわたしに会えたんだよ？」

なのに、…どうしてそんなに悲しそうなの？」

「それは、…。」

先生は急に押し黙った。わたしはそれを黙って見ていた。

「…………、それは、…かなえが変わってたから。」

「…」

「2年前とは違って、凄く大人になってて、きれいになってた。」

かなえはもう、俺の知ってるかなえじゃなかった。」

「そんなんっ、わたし、全然変わってないよ！」

「いや、変わった。変わったんだ。」

「変わってない！ それは確かに髪は伸びたし、服の趣味だって変わったし、お酒も飲めるようになった。けどっ！

…先生のこと一度だって忘れたことなんてない！

先生に言われて、すっかり割りきらなきゃって、わたしと先生は、教師と生徒なんだって、思おうした。でも、わたし、できなかった。心の中ではずっと先生のことを思ってた、今日会ってそれが確信に変わった。

わたしは今でも先生が好き…。

だから、お願いだから、…変わったなんて言わないで

…。」

自分でも気づかないうちに泣いていた。手で顔を覆う。流れる涙が止まらない。わたしの手に先生の手が触れる。“泣かないで。”そう言われている気がした。あの日と同じように。

「かなえ、ごめんな。違うんだ。」

かなえがあまりにもきれいになってて、俺驚いた。昔よりずっとずっときれいで、ずっとずっと可愛くて。

…離れていくんじゃないかと思った。もう会えなくなるんじゃないかって。俺とは別の、若い男と結婚して、俺のことなんか忘れちゃうんじゃないかって。

俺、それだけは絶対嫌でさ。そうなるくらいなら強引にでも抱いて、何が何でも離さないようにしようと思った。…けど、できなかった。かなえが俺のこと優しく受け入れてくれたから。

そうしたら急に悲しくなって、虚しくなって、俺はなんて馬鹿なんだろうって、

「もういいよ、先生。先生の気持ち、十分伝わったから。」

と言って涙を拭くと、わたしは起き上がって先生の背中に腕をまわした。

「わたしはここににいるから…。ずっとそばにいるから…。」

先生がわたしを強く抱きしめる。同じシャンプーの匂いがした。

「かなえ、…愛してる。」

「わたしも、先生のこと大好き。」

そつと手を緩めると、お互いに見つめあった。それがなんだか可笑しくて、2人に笑みがこぼれる。

そして、まるで磁石のように引き付けられた2人は、深い深いキスをした。先生がわたしをベッドに倒すと、スプリングが軋む音がした。それがなんだか生々しくて、少し恥ずかしかった。ちよつと気になると、かなり気になるもので。

「あつ、っ先生、待って、」

「んー、

もう待てない。」

ニヤリと子どもみたいに笑った先生は、わたしの首に顔をうずめた。

*
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6640v/>

思っても、想っても。

2011年10月9日13時00分発行